

ゲームと社会の可能性



国際言語文化学科

ディハーン・ジョナサン
(Jonathan deHaan)

● 連絡先 TEL: 054-264-5355

キーワード 教育ゲーム, ゲームデザイン, 教授法, 生涯学習, 教育改革, コミュニティ (地域), クリエイティビティ (創造性), クリティカルシンキング (批判的思考法), 第二言語習得



ゲーム(ボードゲーム、テレビゲーム、オンラインゲームなど)を用いた第二言語指導や学習サポートとシミュレーションに関心があり、教育の向上に寄与すべく、教室、地域社会、家庭、またオンライン空間において、楽しく効果的に学習・指導する方法を研究し、その実践に取り組んでいます。

現在、ゲームラボでは以下のプロジェクトを行なっています

- ・コミュニティ(地域): 児童館にてゲームを教え、ゲーム遊びを通して子供や家族にもたらし社会的、心理的、認知的効果を調査する。
- ・コラボレーション(連携): 地元企業にアプローチして、彼らのビジネス手法を学び、また彼らの製品と市場を支援、発展させる方法を探る。
- ・クリティカルシンキング(批判的思考法): プロのゲームデザイナーと交流し、より改善されたゲームを市場投入できるよう、彼らの製作中のゲームを評価するシステムを立ち上げる。
- ・クリエイティビティ(創造性): 高速プロトタイプを通じて、我々自らが革新的ゲームを開発する。

ゲームラボでは企業や団体と以下のようなプロジェクトを行なうことが可能である。

- (1) 革新的(教育)ゲームを作る。
- (2) 開発(教育)ゲームを評価し、改善する。
- (3) 学校、病院などのコミュニティ組織でゲームのプログラムを確立する。



**アピール
ポイント**

Learn to play; play to learn.
(再生することを学ぶ、学ぶために遊ぶ。)

言語産出研究、言葉への気づき教育

てら お やすし
国際言語文化学科 寺尾 康

●連絡先 TEL: 054-264-5252

キーワード

言い間違い分析, 言語産出モデル, 言語教育



言い間違いという、すきま的な言語資料を使ったユニークな研究
ポスト早期英語教育としての言葉への気づき教育についての研究

言い間違いはただの笑いの種になるだけではなく、言語産出の過程を知る上で重要なデータである。新聞コラムで取り上げられる日常の「間違った日本語」と呼ばれるものにも学問的な背景がある。言い間違いの観察、心理言語学的な実験を行い、言語産出モデル中の文法的符号化、音韻的符号化について研究を試みている。

小学校に必要なのは英語教育というより言語教育である、という観点から面白いことばへの気づき教材を作りたいと考えている。



総合知としてのハラールサイエンスの確立とハラール産業を通じた普適的商品・サービスの探究



国際関係学科

とみ ざわ ひさ お
富沢 寿勇

● 連絡先

TEL : 054-264-5321 FAX : 054-264-5321

キーワード 総合知, ハラールサイエンス, ハラール産業, イスラーム, ムスリム, 一般消費者, 普適的商品・サービス, ツーリズム, 認証制度



ムスリムは現代世界で巨大な消費者層を形成しつつあり、産業界にとって無視できない存在となっている。イスラーム市場を対象としたハラール産業は食品、医薬・化粧品、衣料品から輸送・貯蔵、金融・保険、ツーリズムなどのサービス分野に至る広範な領域にまたがる。また同産業は、商品規格や品質保証、安全性などの国際基準を満たした上でハラール性を付加価値として加えつつ、認証制度を推進して、ムスリム、非ムスリムを問わず、一般消費者のニーズを満たすような普遍性の高い商品・サービスの開発を目指す具体戦略を取るのが常道になっている。このような背景に鑑み、私は人文社会科学と自然科学にまたがる総合知としての広義のハラールサイエンスの確立を提唱しつつ、グローバルな消費社会におけるローカルな価値観や多様な宗教規範を満足させる、より普適的商品・サービスとは何かという課題に取り組んでいる。



(図1) バイオセンサー研究の民谷栄一教授(大阪大)らと日本ハラールサイエンス学会を設立し、人文社会科学と自然科学の総合知としてのハラールサイエンスの確立を進めている。本書はその試みの成果である。



(図2) イスラーム圏を射程に入れてハラール食品開発を進める県内食品卸企業との共同研究の成果の一端として関係者に配布された「しずおかムスリムおもてなしガイドブック」。(富士農商事株式会社との共同研究による成果)

アピールポイント

グローバル展開を目指す企業のハラール対応や、国内のムスリムツーリズム対応などに関し、講演や相談などのご協力はできます。

言語構造の普遍性と多様性に関する研究



国際言語文化学科

ながの あきこ
長野 明子

● 連絡先

TEL : 054-264-5354

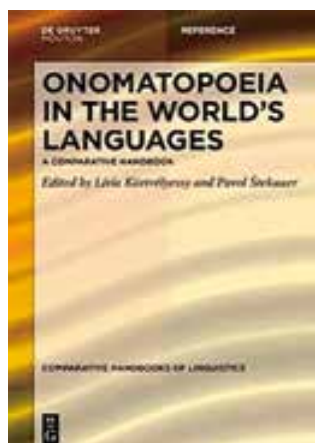
E-Mail : nagano.9@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード 言語学、英語学、言語理論、
言語変異・変化、形態統語論、語彙意味論

ノーム・チョムスキー（米国の言語学者、1928-）によって開始された生成文法理論を基盤にして、人のこころに表示される自律的体系としての言語について研究を行っている。チョムスキーは、幼児の母語獲得の事実から、人は皆、生得的に普遍文法をもつと仮定した。だがこの仮定にたつとき当然疑問になるのが、世界の言語の多様性や日本の地域方言の多様性である。また、言語は常に変化するという事実についても、どう考えればよいか。言語の普遍性と多様性に関するこうした問いにさまざまなデータや分析枠組みを用いて取り組んでいる。これまで日本のみならずヨーロッパ各国の研究者らと研究プロジェクトを実施し、文法や語彙の諸現象について記述と理論に基づく分析を行ってきた。例えば、言語学の代表的出版社から「語形成における競合」についての論文集を出版したり、「世界の言語のオノマトペ」ハンドブックに日本語の章を寄稿するなどしている。



Bagasheva, Nagano, and Renner (eds.)
2024. Competition in Word-Formation
[Linguistik Aktuell/Linguistics Today,
284] Amsterdam/John Benjamins.
<https://doi.org/10.1075/la.284>



Körtvélyessy & Štekauer (eds.) 2024.
Onomatopoeia in the World' s Languages
[Comparative Handbooks of Linguistics]
Berlin/De Gruyter Mouton.

障害をめぐる〈共生の文化〉に関する実証的研究

なぐら きょうこ
国際言語文化学科 奈倉 京子

●連絡先 TEL: 054-264-5346
E-Mail: nagura@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード 日本と中国、障害、スペシャルオリンピックス (SON), 共生の文化、ケアのコミュニティ、カルティベーション (cultivation), フィールドワーク, 就労継続支援B型



本研究は、障害者権利運動と連携しながら障害者の社会的包摂を指向するのとは異なる視点に立ち、様々な差異をもつ人々が、官許の統治の論理に巻き込まれず、かつ当事者（障害者およびその家族）の主体性に過度に頼らない共生論理を如何にして形成できるかを検討する。具体的には、「スペシャルオリンピックス静岡」を対象に、言語的な意思表示が困難な中重度の知的障害をもつ成人と支援者、介助者等多様な存在者たちが、家族を超えた他者とつながる「中間的領域／組織」における相互行為、協働作業を通して、「健常者（マジョリティ）／障害者（マイノリティ）」という二項対立の壁を乗り越える「共生の文化」を生み出すことは如何にして可能かということを、参与観察により探究する。

これまで障害者の共生は、主流社会に何らかのかたちで「統合」されるか、それに対して自己主張をするかで実現できると考えられてきた。これに対し本研究では、「カルティベーション (cultivation, 耕すこと)」を手がかりに、日常のミクロな社会関係における社会的価値をつくりかえることで生まれる「共生の文化」を探究する。



アピール ポイント

奈倉京子『中国の知的障害者とその家族—「新しい社会性」のエスノグラフィー』
東京：東方書店、2023年2月。

19世紀から20世紀のフランス文学と社会

にしむら あきえ

国際言語文化学科

西村 晶絵

●連絡先

TEL : 054-264-5348

E-Mail : a-nishimura@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

フランス文学, キリスト教, ジェンダー, セクシュアリティ, アンドレ・ジッド, ナショナリズム



19世紀末から20世紀前半に執筆活動を行った作家アンドレ・ジッド (1869-1951) を中心としたフランス文学の研究を行っています。ジッドはプロテスタントかつ同性愛者という二つの点で、フランス社会のマイノリティでした。カトリック的な価値観が浸透し、同性愛についての差別や偏見がまだ根強かったフランス社会において、この状況に一石を投じようとしたのは、ジッドをはじめとした作家たちでした。

社会問題に対して積極的に発言し、社会で存在感を示していた作家たちそれぞれの立場を、宗教思想とも絡めながら整理し、その特徴を明らかにすることを目指しています。現在は、19世紀末に台頭し、多くの作家たちを惹きつけた極右政治思想団体とカトリックの結びつきについても関心を持っています。



(1) アヴィニョン教皇庁



(2) モン・サン＝ミシエルの修道院



(3) ノートル＝ダム大聖堂 (パリ)



(4) サクレ・クール寺院 (パリ)

アピールポイント

これまで「病」というテーマでジッドの文学研究を行ってきました(『アンドレ・ジッドとキリスト教―「病」と「悪魔」にみる「悪」の思想的展開』、彩流社、2022年。拙著にて第40回渋沢・クロード賞奨励賞受賞)。コロナ時代と文学・文化などのテーマでのレクチャーも可能です。

ビザンティン帝国史およびギリシャ文化史の研究

はしかわ ひろ ゆき

国際言語文化学科

橋川 裕之

●連絡先

E-Mail : hashikawa@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

古代ギリシャ・ローマ文明、ビザンティン帝国、ヘレニズム、キリスト教、哲学、歴史叙述



私の専門は広く言えば西洋史学あるいはヨーロッパ史学、狭く言えば、東ローマ／ビザンティン帝国の研究です。ビザンティン帝国とはコンスタンティノープル(今日のイスタンブール)を首都として、1453年まで存続した東方のローマ帝国のことです。「ローマ人の共和国」(ラテン語でRes publica Romana)、つまり正式なローマ帝国を標榜したこの国家で生じた様々な事件や現象、社会・文化・制度の特質と変化のプロセスなどを当時の様々な史料にもとづいて解明することが私の課題です。ここ何年かは、世界史におけるビザンティン帝国の役割、すなわち、中世に栄えたこの国家が古代世界から何を受け継ぎ、周辺世界(たとえばルネサンス期のイタリア)や後の世代に何を引き渡したかという問題にも取り組んでいます。



皇帝ユスティニアヌスと皇妃テオドラ
ラヴェンナのサン・ヴィターレ教会のモザイク



ローマのサン・ピエトロ広場

アピール ポイント

私の専門にかかわるトピックのレクチャー等、対応可能です。

教科外の教育活動の歴史社会学研究

はしもと まさる
国際言語文化学科 橋本 勝

●連絡先 TEL : 054-264-5243

キーワード

教育, 社会, 教師, 特別活動, 学校行事, 運動会

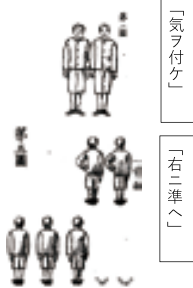


私は、日本の小学校における「教科外の教育活動」の歴史を研究しています。日本の小・中学校ならびに高校のカリキュラムは、国語や社会、数学などの教科の領域と、道徳や特別活動など教科外の教育領域から編成されています。この中の特別活動は、学級・ホームルームを単位とする活動や、全校生徒による生徒会活動、そして、運動会や展覧会や学芸会などの学校行事を内容としておりますが、私は、おもに学校行事の歴史を調べてまいりました。

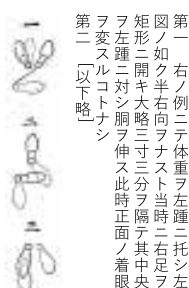
運動会は、種目の一つとして、気を付け！・右にならえ！・まわれ右！などの「隊列運動」が行われた。運動会は、近代的な「規律訓練」を普及させるメディアでもあった。

初期の運動会の記事

北足立郡蕨宿頭神学校にては去月〔10月〕九日を以て同郡新曽村妙見寺に向け遠足運動を催せり〔略〕進路は中仙道を南に取り行く数丁余更に右折して又数丁を歩せば戸田学校（新曾分教室）に至る茲にて暫時休憩して後軽体操隊列運動を行ひて終て又隊伍を整へ道を西に取り暫らくして妙見寺に着す〔略〕」埼玉教育雑誌 第62号 明治21年11月5日



水野浩『新撰体操書』（明治19年）



広瀬伊三郎『新式隊列運動法』（明治20年）

「廻レ右」の説明と足の運び方

第一 右ノ例ニテ体重ヲ左踵ニ托シ左図ノ如ク半右ヲナスト當時ニ右足ヲ矩形ニ開キ大略三寸三分ヲ隔テ其中央ヲ左踵ニ対シ胸ヲ伸ス此時正面ノ着眼ヲ変スルコトナシ
第二（以下略）

遠く離れた埼玉県と静岡県の高女学校で同じような運動会を実施している。運動会はある特定の社会階層の文化や、ジェンダー文化の醸成装置でもあった。



浦和高等女学校の運動会（明治42年）埼玉県教育史 第4巻



田方郡立三島高等女学校の運動会（大正2年）三島HP（目で見える「三島の歴史」27,000年のあゆみ）

アピールポイント

教育の歴史社会学を研究しています。

ロシアの思想・イデオロギー、アイデンティティと国際政治

国際関係学科 **はま ゆ き こ**
浜 由樹子

●連絡先 E-Mail : yhama@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

ロシア, 国際政治, ユーラシア主義,
アイデンティティ, アジア主義, イデオロギー



国際政治と国家・地域のアイデンティティ（「我々はどこに属するのか」「我が国とは何か」）の関係について研究している。主たる事例として、これまでロシアと日本を取り上げてきた。いずれも、近代化の開始以来、ヨーロッパとアジア、西と東の間で独特のアイデンティティ形成を進め、歴史的転換点を迎えるたびにこの問いに向き合ってきた国・地域である。

ソ連邦解体後のロシア社会では「ロシアとは何か」が切実に問われた。なかでも、ロシアを「ヨーロッパとアジアの間の独特な多民族・多文化地域」と定義したユーラシア主義と呼ばれる思想は、幅広い層からの注目を集め、今ではロシアの外交理念にも影響を与えている。国際政治における現代ロシアをどう捉えるか、日本はこれにどう向き合っていくことができるか——「ユーラシア」概念をキーに考察している。



「ロシア：ヨーロッパとアジアの間」

アピール ポイント

2022年以来、ロシア・ウクライナ戦争についての解説や講演、取材対応も多数行っている。

福沢諭吉の全集未収録社説の発掘



ひらやま よう
国際言語文化学科 **平山 洋**

●連絡先 TEL：054-264-5388 FAX：054-264-5388

キーワード

福沢諭吉, 時事新報, 石河幹明, 井田進也, 丸山真男, 脱亜論, 安川寿之輔, 慶應義塾, 日清戦争



福沢諭吉(1835～1901)が主宰していた新聞『時事新報』(1882～1936)の社説の起草者を新たな方法論によって判別したうえ、その中から福沢由来の社説を選び出すことでジャーナリストとしての福沢の全体像を再構成しようとしています。加えて判別の方法論の確立のために、まず福沢の署名入著作の本文をデータベース化し、それらを基礎資料としつつ、無署名社説と語彙・文体の比較を行っています。福沢執筆と推定される全集非収録社説はテキスト化して、署名入著作とともにネット上のサイト「平山洋氏の仕事」で公開しています。

本研究の具体的な目的は福沢健全期(1882・3～1898・9)の全社説の起草者を判定することで、現行版福沢全集の「時事新報論集」(第9巻～第16巻)に適切な加除を施すことです。

国際関係学部



アピールポイント

福沢諭吉の思想について研究しています。

戦争責任、アイデンティティと国際関係

国際言語文化学科 ファイファー・マティアス (PFEIFER Matthias)

●連絡先 E-Mail : pfeifer39@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

戦争責任, 文化とアイデンティティ, 集合的記憶,
日本人論

90年代後半以降、日本では第二次世界大戦についての議論が次第に白熱しはじめ、戦争は大衆文化(映画、マンガ等)でもよく取り上げられるテーマとなった。ドイツでは60年以上にわたるいわゆる「過去の克服」に、「ホロコーストのモニュメント」の完成によってとりあえず終止符が打たれたが、日本のほうは議論の終わりがまだ見えない。グローバル化の中で世界における自分の位置を探している日本と日本人のアイデンティティーが、過去と密接につながっている問題であることは、特にバブル崩壊後にメディアで取り上げられている戦争責任論でよく表わされている。日本と似た歴史を持つドイツと比較して、その戦争責任論の相違点と共通点を明らかにし、ドイツの成功と失敗から日本が何を学べるかが、研究のアピールポイントである。

第二次世界大戦(または太平洋戦争、15年戦争)の大衆化は最近の現象ではない。実は50年代から様々なジャンル(映画、文学)で戦争体験は取り上げられていた。70年代から80年代にかけて戦記マンガのブームも見られる。90年代から、大衆向けの戦争映画や小説がベストセラーになった。戦争を描写する漫画は過去と現在、日本とアジアとの関係などのテーマは、以前よりも日本社会で注目の的となった。それは元々人気のあるジャンルである「日本人論」の延長であると言える。そういう映画、マンガの中で日本人であることはどう描写されているか、その内容が観衆や読者のアイデンティティ形成にどう影響しているかが、本研究の目的である。

アピール ポイント

「ドイツ語圏(ドイツ・スイス・オーストリア)を中心に、ヨーロッパの文化・社会・歴史への理解を深めるための、文化交流ほか各種交流を行う組織等の支援ができる。相談、講演、翻訳・(逐次)通訳(ドイツ語、日本語、英語)、分野別の要綱作成など。」

文学による地域の魅力の創出 するが文化の散歩道／しずぶんプロジェクト



ほそかわ みつ ひろ
国際言語文化学科 細川 光洋

- 連絡先 TEL : 054-264-5342
E-Mail : hosokawa@u-shizuoka-ken.ac.jp
- しずぶんプロジェクトHP <https://shizubun.sakura.ne.jp>

キーワード 地域資源としての文学, 文化資源学, コンテンツツーリズム,
するが文化の散歩道, しずぶんツアー, 小泉八雲



2016 年に焼津小泉八雲記念館、焼津市観光協会とゼミとの連携プロジェクト「焼津&八雲 Y Y プロジェクト」を発足。文学を文化資源ととらえ、地域の新しい魅力づくりに取り組んできた。

2018 年には、文学館連携による「しずぶんツアー」を企画・提案。同年秋、中勘助文学記念館（静岡市）、藤枝市文学館、焼津小泉八雲記念館をめぐる学生によるガイドツアーを開催。2019 年秋には、3 館にあたらに静岡市立芹沢鉦介美術館を加え、2020 年度からは 4 館をめぐるスタンプラリーを開催している。ツアーのロゴやリーフレット、ノベルティグッズやオリジナルスタンプも学生たちによる制作。第 6 回となる 2023 年度には、スタンプ帖のデザインを一新し、各館にオリジナルの猫キャラクターを制作している。猫キャラの入ったノベルティ・グッズは好評を博した。



にゃかかんすけ君

「するが文化の散歩道」スタンプラリー帖 2023 と
ノベルティ・バッグ



スタンプ帖デザイン（キャラクター猫入り）

アピール ポイント

平成28年度「地域みらい研究賞」（静岡県立大学）受賞。
焼津魚河岸マーク入り「八雲手拭い」「妖怪手拭い」（2017）、「焼津やいちゃんLINE
スタンプ」制作（2017）「しずぶんガイド」(2018)

ロシアの東方政策と極東地域開発に関する研究



ほりうち けん じ
国際言語文化学科 堀内 賢志

● 連絡先

E-mail : khoriuchi@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

ロシア、ロシア極東地域、東方シフト



ウクライナへの軍事侵攻を開始したロシアは、国際社会から強い非難を受け、厳しい制裁を受けることになりました。一方で、「グローバルサウス」と呼ばれる非西側諸国、特にアジア・ユーラシアの国々には、ロシアにより宥和的な姿勢を持ち続ける国も多く存在します。プーチン政権はかねてから、アジア太平洋諸国との関係強化と極東・シベリア地域の開発を進める「東方シフト」を進め、アジア・ユーラシアの国々との関係強化を図ってきました。ウクライナをめぐる西側諸国との対立激化の中、ロシアはエネルギー開発や輸送インフラの整備、極東地域の社会インフラ整備などを通じて、その取り組みを一層強化しようとしています。こうした政策の進捗状況を追いながら、国際秩序の行方、そして日露関係の今後についても考察しています。



ウラジオストク・ルースキー島の極東連邦大学キャンパス。2012年にウラジオストク APEC の会場として建設され、2015年より年次開催されている「東方経済フォーラム」の会場ともなっている。



中露国境の川に浮かぶボリショイ・ウスリースキー島（中国名・黒瞎子島）とロシア側をつなぐ橋。同島はかつて中露領土問題の係争地だったが、2004年に「面積等分」での分割が合意された。

アピールポイント

日本の隣国であり、現在厳しい対立関係にある一方、天然資源などで協力関係にもあるロシアを理解することは、きわめて重要です。

静岡の政治 日本の政治（比較研究）

まえ やま りょうきち

国際関係学科

前山 亮吉

●連絡先

TEL：054-264-5265

キーワード

静岡, 日本, 政治構造, 地方政治, 比較, 選挙, 投票行動, 政治史



静岡県の政治は日本政治の縮図といわれて久しい。しかしそんな静岡県の政治にも大きな構造変動の予兆が見られる。こうした予兆の持つ意味を考察することが本研究のアピールポイントである。

目的・概要は2008年7月刊行の拙著『静岡の政治 日本の政治』（静岡新聞社、静新新書25）の「はじめに」に記したとおりである。比較（国際・国内）と政治史（過去との比較）という方法を駆使して、静岡県の政治の構造変動を分析している。「保守王国」とのみ言われることの多い静岡政治の新たな顔を発見する事をめざす。

研究途上であるがいくつかの発見を箇条書きで記すと次のようになる。

- ・市町村合併の結果、旧郡部を統合して出来た県内新市における投票行動には都市型への変化が見られる。
- ・上記変化は政令市である浜松市で特に顕著であり、北・西・天竜区では従来見られなかった投票行動が05衆院選・07参院選で観察できた。
- ・戦後の静岡県知事は約20年～26年という長いサイクルで官僚と政治家との間を往復しているように考えられた。しかし、官僚でも政治家でもない学者・川勝知事の登場は、画期的な事態である。

ヒスパニック世界の形成と展開



まつもり なつこ
松森 奈津子

国際言語文化学科

- 連絡先 TEL : 054-264-5263
E-Mail : nmatsu@u-shizuoka-ken.ac.jp
- ホームページ <https://matsumori.memento-mori.casa>

キーワード ヒスパニック, スペイン, ラテンアメリカ, 移民, 多文化主義, 共存, グローバリゼーション, 大航海時代, カトリック



ヒスパニックとは、スペインと、ラテンアメリカやアジアにおけるその旧植民地諸国（メキシコ、キューバ、プエルトリコ、フィリピンなど）の人々や文化を総称する言葉です。近年は特に、ハイチ（フランス語圏）やブラジル（ポルトガル語圏）を含めたラティーノという言葉とともに、アメリカ合衆国最大のマイノリティ勢力を指す用語として、メディアなどで広く使われています。ヒスパニックの特色は、スペイン語を母語とし、カトリックの伝統に基づく価値観を共有する点にあります。我が国でも、この文化圏から日系を中心とする定住外国人の受け入れが進んでおり、身近な異文化の一つです。

私の研究は、こうしたヒスパニック世界が歴史的にどのように形成されてきたのかを、グローバリゼーションの端緒とされる大航海時代（15c.半～17c.半）を中心に明らかにするものです。また、この文化圏の人々が移民という形でアメリカや日本に定住する現代において、既存の社会との共存はいかにして可能になるのかを、多文化主義の観点から模索するものです。



スペイン語話者の分布

〔出典：Spanish Language Domains <http://spanishlanguagedomains.com/the-spanish-language-the-facts-and-figures/>〕

アピールポイント

ヒスパニックの歴史的・文化的・宗教的背景をお伝えし、ビジネスや交流を望む自治体や企業とのかけ橋になればと思います。

国際経営論、経営学

みやざき くに お

国際関係学科

宮崎 晋生

●連絡先

TEL&FAX : 054-264-5338

キーワード

国際経営論, 経営学, 企業の発展史,
コラボレーションとオープン・イノベーション



現在の関心は企業・組織間の連携によるイノベーションです。一方当研究室では地域の企業の皆様を集めたコラボレーションのためのワークショップを行う予定です。地域にて組織/企業の枠を超えて、複数の企業・組織が共同で新しい技術や商品・サービスの開発をおこなうきっかけになるオープン・イノベーションの「場」を創りたいと考えております。

特に、これまでチャレンジしてきたがうまく花開かなかった技術・知識/(死蔵)特許や、これから挑戦したいが社内の賛同が得られにくいという技術・商品・サービス企画を発掘、再チャレンジする「場」の創造を目指しています。

静岡県は「産業のデパート」と呼ばれ、製造業比率が高い全国有数の「ものづくり」県です。しかし、アジア諸国の経済成長もさることながら、ドイツを中心とした製造業革命プロジェクトである「インダストリー4.0」が進められている中、「ものづくり」県の評価もいつまで続くか不透明です。過去の成功体験やこれまでのパターン/法則にとらわれず、異質な知識が結びつく「場」づくりを進めていきたいと思います。

また革新的な取り組みを行って来た企業様にとりましては、過去の歴史を振り返ることもお考えの向きがあらうかと存じます。社史づくり等にもご協力できれば幸いです。



ワークショップの様子



学生による静岡県イノベーション企業の調査



国際関係学部

アピールポイント

業界やセクターの枠を超えた、新しい結びつきを創る「場」を一緒につくりましょう。

アフリカにおける政治変動と越境移動

むら はし いさお

国際関係学科

村橋 勲

●連絡先

TEL : 054-264-5381

E-Mail : i_murahashi@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード 東アフリカ、モビリティ、難民、人道支援、紛争、物質文化、気候変動



アフリカにおける政治変動と国境を越える移民・難民、そして人道支援について研究しています。脱植民地化が進んだ後も、植民地時代に作り出された国境、制度、エスニシティなどが、さまざまなかたちで人々の生活に影響を及ぼしています。難民や人道支援をめぐる法制度や枠組みは絶えず変化していますが、そこには国連機関を中心としたグローバルな取り組みと難民を受け入れる国家の制度が複雑に絡み合っています。今日、気候変動を含め、人が移動する要因は多様化し、越境はますますグローバル化しています。一方、移民・難民の受け入れをめぐる課題は容易に解決できない問題となりつつあります。そこで、アフリカにおける越境をめぐるさまざまな事象とその複合的な背景、移民・難民の受け入れをめぐる諸課題について検証しています。



**アピール
ポイント**

東アフリカにおける政治変動や紛争、難民支援に関する情報提供、相談、解説などについて対応できます。

第一次世界大戦期・大戦後のアメリカ社会

国際言語文化学科 もう こ あい か
望戸 愛果

(本研究内容についてご興味のある方は、地域・産学連携推進室までご連絡ください。)
TEL : 054-264-5124 E-Mail : renkei@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

アメリカ合衆国, 戦争体験, 歴史社会学, ジェンダー,
第一次世界大戦

第一次世界大戦期・大戦後のアメリカ社会について、歴史社会学の視座から研究を行っています。今まで取り組んできた主な研究テーマは、下記の通りです。

1. 男性退役軍人組織の設立と戦場巡礼事業
2. 女性従軍体験者の組織化過程
3. 戦中・戦後における戦没兵の母親の役割

加えて、アメリカの政治学者シンシア・エンローについての学説史的な研究も行っています。エンローは、戦争・軍隊のジェンダー分析に取り組んだパイオニアとして知られている研究者です。



「戦争体験」とジェンダー

アメリカ在郷軍人会の
第一次世界大戦戦場巡礼を読み解く

望戸 愛果

明石書店

日本におけるフェデリコ・ガルシア・ロルカの受容



もり なお か
国際言語文化学科 **森 直香**

● 連絡先 E-Mail : naokamori@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

スペイン文学, 比較文学, 受容研究,
フェデリコ・ガルシア・ロルカ



本研究は、スペインの詩人・劇作家フェデリコ・ガルシア・ロルカ(1898~1936)の作品の日本における受容についての初めての体系的な研究である。彼の作品はセルバンテスと並んで世界中で愛読されているが、日本における受容についての細かい検討は行われていない。本研究ではロルカ作品の受容を概観した上で、当時の書評・劇評・論文等を参考にしながら日本人読者が何を期待して作品を読み、どのような点を評価しているかを考察し、受容を推進した要因を明らかにすることを目的とする。このような分析は作品の本質を明らかにするだけでなく、外国文学の紹介・翻訳のあるべき姿を探ることにもつながり、文化の発信について考える上でも有益である。

本研究では、戯曲を中心にロルカ作品の日本での受容の過程を検討し、以下の4点に焦点を当てて受容を推し進めた要因を明らかにする。

1) ロルカ作品の受容に影響を及ぼした要因

日本においてロルカ作品の受容が本格化するのは第二次世界大戦後のことである。ロルカの受容がなぜ1950年代に急激に進んだのか、受容を推し進めた要因を考察する。

2) 日本人読者の解釈・評価

ロルカの作品は、1950年代に本格的に紹介されると、三島由紀夫、安部公房らの文豪を含む多くの読者を惹きつけた。日本人読者が作品にどのような評価を下したかを考察し、日本でも広く読まれている理由を探る。その理由としては3) 4)に挙げる作品の普遍性、日本文化とロルカの世界観の共通点にあるのではないかという仮説を立てているが、考察を通じてそれを実証する。

3) ロルカ作品の普遍性

ロルカ作品の普遍性は、戯曲の場合、①テーマの普遍性と②俳優の動きと台詞から舞台装置に至るまでの様式化によると考えられる。様式化とは、対象をそのまま描写するのではなく、単純化・類型化して表現する技法で、能・文楽・歌舞伎に多く見られる。ロルカ戯曲では、俳優の台詞・動きから舞台装置に至るまで様式化が見られるが、様式化はどの時代のどの場所にも適用可能な普遍性を作品に与える。

4) ロルカ作品の世界観と日本文化の共通点

ロルカ作品が日本で愛されている理由はいくつか挙げられるが、その中に独特のキリスト教解釈とキリスト教以前の世界に属する原始的かつ汎神論的とも言える世界観があり、特に三大悲劇に色濃く表れている。

戦時・占領期の紙芝居研究



国際関係学科

もり やま あつし

森山 優

● 連絡先

FAX : 054-264-5099 (総務室)

E-Mail : moriyama@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

日本近現代史, 戦時体制, 占領期, メディア史, 地域史, 紙芝居



本学図書館は、掛川の篤志家、浦上喜平氏が収集・使用した一九四点の紙芝居（浦上史料）を所蔵しています。浦上氏は戦争中、掛川に集団疎開して来た東京の児童たちの世話や慰問活動に奔走し、その一環として紙芝居を上演しました。一個人が実際に使うために集めた史料群としては、国内最大規模です。紙芝居は子ども向けのものに加え、戦時期は政府が大人に向け国の政策をわかりやすく広めようとする内容のものが多く出版されました。浦上史料はそのどちらも含んでいます。本学の紙芝居研究会は、政府が国民に何を伝えようとしたか、人々がそれをどのように受容していったかを、具体的に研究しています。戦時期と占領期は180度異なる社会と思われがちですが、紙芝居というメディアを使って国民を啓蒙しようとする国のスタンスは一貫しています。



『金物総動員』日本教育紙芝居協会、1941（昭和16）年



『農地改革』発行年、発行者不明、戦後

アピールポイント

過去を学ぶことは、現在を知り、未来をよりよくする手がかりをつかむことです。地域に残された遺産を後世に伝えましょう。

国際社会の平和と安定に向けた協力の現状と展望



国際関係学科

やま した ひかる

山下 光

● 連絡先

TEL : 054-264-5336

● ホームページ

<https://db.u-shizuoka-ken.ac.jp/show/i-yamashitahikaru.html>

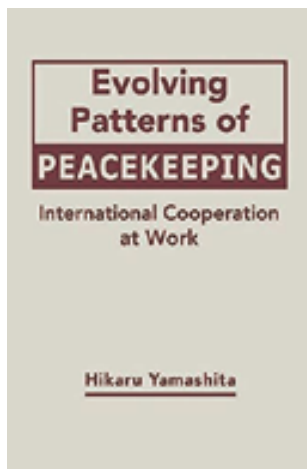
<https://researchmap.jp/hikaruyamashita>

キーワード

国際平和、国際協力、国際政治学、平和維持活動、平和構築、国際関係理論、国際組織・機構、人道・人権問題、安全保障



世界各地で発生する紛争や戦争を終結させ、平和をもたらすために国際社会が行う活動（平和維持：PKO、平和構築、人道支援など）を主な研究テーマとして活動する一方、安全保障や国際関係理論に関連する教育や研究も行っています。心がけているのは、常に国際政治全体の動きをとらえながら具体的な問題を考えていく姿勢です。官民のシンクタンクで政策研究を行ってきた経験も活かしながら、現在や今後の国際政治、国際協力、国際秩序がどうなっていくのかを考えていきたいと思っています。



単著『平和維持活動をめぐる国際協力—協力パターンの進化と意義』（英語）



単著『人道的空間と国際政治』（英語）



単著『国際平和協力』

現代中東における政治・紛争・宗教



国際関係学科 やまもと けんすけ
山本 健介

● 連絡先 E-Mail : k-yamamoto@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

社会運動

中東，イスラーム，パレスチナ，エルサレム，聖地，



現代中東の政治、特にパレスチナ問題という紛争の研究をしています。なかでもエルサレムをめぐる諸問題について多角的に分析してきました。これまでは複数の宗教伝統が重複する聖地の紛争について研究してきましたが、最近では、イスラエルの占領・併合下に置かれているエルサレムで、パレスチナ人の住民がどのような抵抗活動を実践し、いかに日常生活を営んでいるのかという点にも関心を持っています。エルサレムの事例を中心にパレスチナ問題の研究を進めつつ、今後は、世界に見られる他の政治・紛争現象との比較も視野に入れていきたいと考えています。



写真 (1) 岩のドーム (エルサレム)



写真 (2) パレスチナの象徴オリーブの樹 (ヘブロン)

アピールポイント

複雑に入り組んだ構造を持つパレスチナ問題について学び、物事を多角的・多面的に捉える訓練をしませんか？

アジアのマイノリティの人々の生活・文化・仕事・音楽

よね の

国際言語文化学科

米野 みちよ



- 連絡先 TEL : 054-264-5124
E-Mail : michiyo.yonenoreyes@u-shizuoka-ken.ac.jp
- ホームページ 外国人EPA看護師プロジェクト <https://www.epa-project.com>
フィリピン・カリンガ口承伝説 <https://www.iocu-tokyo.ac.jp/~yoneno/database.html>

キーワード フィリピン、ゴング音楽、民謡、先住民、外国人介護士・看護師、在日フィリピン人、在フィリピン日本人、ポストコロナル批判、米国統治下フィリピン



フィリピン北部の先住民の人々は、フィリピン国家の境界の内側に住む。よってフィリピン人である。しかし、その境界の周縁地域に住む。そして、その周縁地域は、アメリカ植民地時代、そしてその後も、より直接的にアメリカと関わった。彼らは、マニラに行っても疎外感を感じてしまう。時として、自国であるはずの、マニラで生産されるフィリピンのポピュラー音楽よりは、アメリカのポピュラー音楽に、より親近感を見出す。そんなギャップに注目している。

日本にいる外国人は、都会でもいなかでも、日本の社会の周縁にすることが多い。半分日本の社会に根を下ろしながら、心と体の半分は、自国や世界を見ている。

そんな彼らの、マイノリティゆえの、「国家」の境界をすりりと超えていくタフさを、研究しています。

“Filipino Nurse Migration to Japan under JPEPA”

(<https://www.asj.upd.edu.ph/index.php/archive/7-filipino-nurses-migration-to-japan-under-jpepa>)

“Overcoming Language Barriers: Filipino/Japanese Youths as Transmigrants in the Philippines”

(<https://www.asj.upd.edu.ph/index.php/archive/10-asian-studies-51-1-2015-emergin-asian-communities-in-the-philippines-coming-soon>)



**アピール
ポイント**

外国人介護・看護人材の雇用や国家試験対策について、情報共有ができる場合があります。

スコットランドの言語／文学とナショナル・アイデンティティー

よね やま ゆう こ

国際言語文化学科

米山 優子

(本研究内容についてご興味のある方は、地域・産学連携推進室までご連絡ください。)
TEL : 054-264-5124 E-Mail : renkei@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

スコットランド, スコッツ語, スコットランド・ゲール語, ナショナル・アイデンティティー



スコットランドの言語と文学を通して、ナショナル・アイデンティティーの在り方について研究しています。イギリスからの独立の是非を問うスコットランドの住民投票(2014年9月)、イギリス総選挙(2015年5月)、EU残留・離脱を問う住民投票(2016年6月)などの際には日本でも高い関心が寄せられました。イギリスという国を理解するにはその地域性を重視する必要がありますが、スコットランド独自の言語文化が歴史的背景と共に深く理解されるには至っていません。スコッツ語やスコットランド・ゲール語という英語以外の地域言語・少数言語の存在に焦点を当て、ヨーロッパの言語政策と照らし合わせながら、言語の社会的地位の向上や使用領域の拡大などを目指す取り組みを考察しています。



アピールポイント

- 地域言語・少数言語の辞書編纂や学校教育に注目しています。
- ヨーロッパにおけるイギリスの位置づけと多文化共生を視野に入れて研究しています。

異文化間コミュニケーション研究



国際言語文化学科

リダンポールアラン
(Paul A. Lyddon)

●連絡先 TEL: 054-264-5350

キーワード

社会記号学, マルチモダリティ,
情報通信技術 (ICT), オンライン国際交流

効果的なコミュニケーションには、ただ単に言語体系をマスターする以上のものが求められる。また、その際に視覚、聴覚、空間、ジェスチャーモードといった、その他の様々な記号資源の中から適切なものを選択し、実行に移すことも求められる。さらには、これらの様々な記号資源の可能域は、社会歴史的に基づくものの他に、社会的相互作用の中で常に意味交渉を重ねながら決められる。このようなコミュニケーションの発達は、とりわけ異なる文化的背景を持った者同士がかかわる際にさらに複雑なものとなるが、デジタル時代の幕開けとともに情報通信技術 (ICT) が爆発的に浸透していった現在、いたるところに見られるようになっている。これを踏まえ、オンラインの環境下で、米国、英国、フランスといった様々な国の伝達者との国際交流を研究している。



アピール ポイント

国際交流の企画及び改善などのご相談について、お気軽にご連絡ください。

複素解析学とタイヒミュラー空間論

あまの まさのり
経営情報学科 天野 政紀

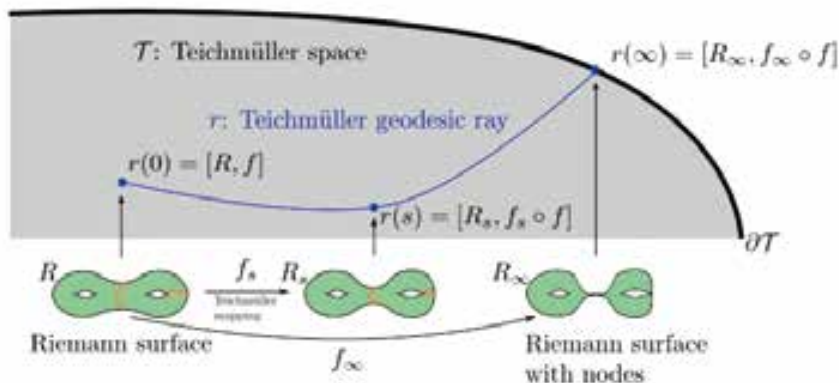
●連絡先 TEL: 054-264-5432

キーワード

複素関数, リーマン面, タイヒミュラー空間論

世の中にある様々な物体の形を数学的に扱うには、数と結びつけて考える必要があります。曲面上に複素数による座標を入れることで、リーマン面と呼ばれる多様体の一種ができます。これらのすべてを同時に考え、各々の曲面の歪み方の違いなどの構造を分類するための基礎理論は、タイヒミュラー空間論と呼ばれ、私の主な研究分野となっています。

タイヒミュラー空間論を利用することで、曲面の違いは曲面間の複素座標を利用してできる複素関数がどれほどの歪みを持つかによって数値化できます。最近の私の研究では、その数値の違いが曲面のどのような要素から発生するかを突き止め、各々の曲面を幾何学的な量を用いてパラメータ化しました。今後の研究では、そのパラメータを用いて曲面の性質を統一的に理解できるようにすることを考えています。



アピール ポイント

本研究はICTイノベーション研究センター活動としても取り組んでいます。

アジアの高齢者ケアと外国人介護人材の育成

あまの
経営情報学科 **天野 ゆかり**

●連絡先 TEL: 054-264-5421

キーワード

介護人材, アジア, 高齢者ケア, 介護留学生,
経済連携協定, 技能実習, 特定技能



急速な人口の高齢化に伴う医療・介護人材、高齢者の健康増進やケアの質の確保は世界規模の喫緊課題である。日本政府は、アジアにおいて、急速に進む高齢化に対応した Universal Health Coverage (UHC) と健康長寿社会を実現するため、「アジア健康構想」を立ち上げた。特に介護人材確保の課題においては、日本国内の対応にとどまらず、介護事業と人材の好循環をはかり、アジアの高齢化と介護システムの開発に貢献するという役割を担っている。本研究では、高齢化と介護人材のグローバル化が進展する中、国内外の関係機関の調査を通し、アジア各国における高齢者ケアの特徴を明らかにし、介護人材の育成と確保の持続可能性について検討している。



写真1 ベトナムの看護大学との交流



写真2 中国の行政関係者等との意見交換

アピール ポイント

高齢者ケアに関する人材確保と育成については、日本だけでなくアジアでも注目度の高いテーマとなっています。

周期性のある事象に対するデータ解析のための確率モデルの構成とその応用

いもとともあき

経営情報学科

井本 智明

●連絡先

TEL：054-264-5449

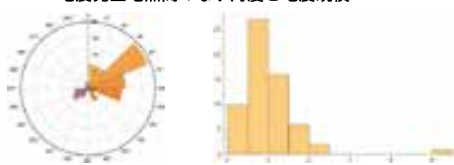
キーワード

統計科学, 方向統計学

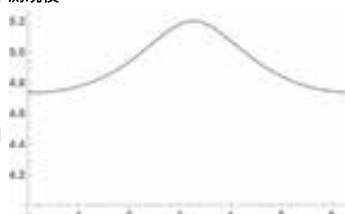


風向や動植物の移動方向のような角度データや、日毎のレストラン来客者数や月毎の観光スポット訪問者数のような時間データのように、周期性のあるデータは円周上データとよばれる。このようなデータを分析し、意味のある結論を導くためには、周期性のあるモデルを用いた統計分析が必要となってくる。この際、データの発生背景を説明でき、かつ発生傾向を上手く表現できるモデルを利用することで、矛盾のない正確な情報をデータから抜き出すことができる。また、そのようなモデルを拡張し、複数の円周上データを組み合わせた超球面上データや、円周上データと周期性のないデータを組み合わせたシリンダー上データを扱うための確率モデルを用いることで多くの情報を利用した分析も可能となる。本研究では、そうした確率モデルの導出や、導出モデルを利用したデータ分析法や予測法に関わる研究を行っている。

地震発生地点間のなす角度と地震規模



予測規模



モデルから予測

シリンダー上での表現

アピールポイント

ICTイノベーション研究センターのメンバーの一員です。

マーケティング



経営情報学科

いわさき くにひこ

岩崎 邦彦

●連絡先

TEL : 054-264-5425 FAX : 054-264-5425

●ホームページ

<https://iwasaki-marketing.jp/>

キーワード マーケティング, ブランドづくり,
マーケティング・リサーチ



岩崎研究室の研究テーマは、マーケティングです。

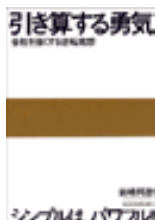
マーケティング研究を通じて、地域の抱える諸問題の解決や地域経済の発展に資する情報発信を行い、“地域の元気”に貢献したいと考えています。これまでも、岩崎研究室では、行政、業界団体、企業等と積極的な連携を行い、地域に対して研究成果を積極的に還元しています。

具体的な研究分野・地域との連携分野は、地域のマーケティング、中小企業のマーケティング、農産物のマーケティング、観光のマーケティング、医療のマーケティングなどです。

研究室の活動概要は、研究室のウェブサイトもご覧ください。<https://iwasaki-marketing.jp/>

「地域の元気」を軸とした著書を出版しています。

地域と中小企業



地域とブランドづくり



地域と観光



地域と農業



地域と医療



地域と消費者空間行動



アピールポイント

岩崎研究室では、マーケティング研究を通じて、地域の抱える諸問題の解決を行い、地域社会に貢献していきたいと考えています。

企業会計基準が金融規制に与える影響に関する研究

うえ の たけふみ

経営情報学科 **上野 雄史**

● 連絡先 TEL : 054-264-5241 FAX : 054-264-5008

キーワード

公正価値, プロシクリカリティ, 金融規制,
会計基準



サブプライム・ローンの問題が会計に投げかけたものは何であろうか。人によって思い浮かべることは様々かもしれない。サブプライム・ローンに対する公正価値測定が曖昧であったことが、会計学者のみならず多くの学識者、メディア、新聞などの報道関係者、政治家による批判の対象になった。さらに、サブプライム・ローンの問題に端を発して、『時価評価』が実体経済に悪影響をもたらすということも現実には懸念されるようになった。いわゆる、プロシクリカリティ (pro-cyclicality : 景気循環増幅効果) の問題である。プロシクリカリティが顕在化すると、時価の評価が金融機関の信用力低下をもたらし、さらには、信用市場の収縮による実体経済に影響を及ぼすという悪循環をもたらす。

時価(公正価値)の是非は別として、サブプライム・ローンの問題で気づかされたのは、会計が実態社会において果たしている役割が、我々の気づかない間に拡大していたという事実ではないだろうか。

金融業に対する最終的な監督責任は、金融規制を担う監督当局にある。しかし、この20年の間、日本を含む欧米先進国においては、規制緩和に伴う金融の自由化が進み、監督の役割を『市場規律』に委ねられる方式に変化していった。いわゆる事前規制から事後規制へのシフトである。市場規律を働かせるために、重要な役割を果たしていたのが会計である。一般に公正妥当な会計基準で作成された財務諸表が、監督目的においても実質的に利用されるようになった。

金融規制と会計基準の境界線が徐々に曖昧になりつつある。金融規制と会計基準とはその役割は異なっている。金融規制は金融機関の健全性を保つためのものであり、会計基準は意思決定に有用な情報を利害関係者に提供するためにある。しかしながら、目的の相違はあるものの、『市場規律を活用する』ために、金融規制と会計基準との協調が求められ、時には政治的な介入も許容せざるを得ない事態が生じている。本研究は、金融規制と会計基準との関係に着目し、その諸問題を明らかにすべく取り組んでいる。